

令和7年度第3回（通算12回目）リハビリテーション委員会 議事録

日時：令和7年8月27日（水）19時から20時

場所：オンライン開催

出席者：池上陽子 岩島千鶴子 榎勢道彦 大嶋志穂 岸本光夫 金子断行 木下裕俊
栗原まな 小玉武志 郷間英世 小林健哉 佐藤匠 鈴木郁子 高塩純一 谷口敬道
豊田隆茂 中村達也 西島和秀 濱田恵里子 松山英知 宮地知美 虫明千恵子 武藤茜
若松育子 橋本悟（書記）計25名

議題：

1. 勉強会（担当：ST部門）

- ① 豊田隆茂先生（島田療育センター）「島田療育センターでの言語聴覚療法について」
- ・島田療育センターの沿革や施設概要についての紹介。
 - ・言語聴覚療法科の取り組み
 - ・個別評価・指導：前言語指導／言語指導／摂食指導・栄養評価・支援／検査
 - ・グループ指導：読み書きグループ／ダウン症乳幼児早期外来グループ／年長児グループ
 - ・講習会（保護者・地域療育関係者・センター内）：ST科講習会／摂食機能療法セミナー／食べプロ／ことばのブログ発信
 - ・派遣事業：訪問リハビリテーション（重心）／特別支援学校への外部専門家派遣／施設支援事業、保育所等訪問支援
 - ・講習会の実践例「食べプロ」：センター内Webでの10分程度のミニ講習会。現在第5回まで実施している。コロナ禍で対面研修が制限されていたが、実際の介助がイメージしやすいなど好評だった。
 - ・書籍紹介：『発達障害や身体障害のある子どもへの摂食嚥下サポート』

② 中村達也先生（島田療育センターはちおうじ）

- ・島田療育センターはちおうじのST業務は8割以上が外来の対応（発達障害のあるお子さんへの言語コミュニケーション指導）。幼児期から学童期。特別支援学校外部専門員としての派遣も今年度から開始された。
- ・臨床以外の取り組み
 - ・JSDR評議員
 - ・ST協会 国際部
 - ・相談支援専門員
 - ・研究・執筆活動

- ・書籍紹介：『人間発達学』『標準言語聴覚障害学 摂食嚥下障害学 第2版』（第3版改訂中）『小児の摂食嚥下障害と食事支援』
- ・重症心身障害児者では、舌骨の前方移動距離が不足している。後に引かれてから前に移動するタイプと、前方移動が中断するタイプの2タイプが見出された。舌骨運動からみる嚥下障害のメカニズム 頭頸部の姿勢や下顎の不安定性が嚥下動態に影響を与え、その結果として誤嚥が生じる。
舌骨運動からみる下顎のコントロールの効果：下顎のコントロールをすることで舌骨が後方に引かれる程度が軽減し、前方への移動量が増大した（仮説通りの結果）
- ・絶飲食の重症心身障害児者こそ、摂食嚥下リハビリテーションが必要なのでは？
絶飲食は必ずしも誤嚥を防げない（認知症研究から）。食べ物を食べていないとは言え唾液は飲み込むため、廃用性の筋委縮により唾液誤嚥のリスクが増加する。
- ・PedIEAT 日本語版の開発。標準値や標準化データは論文投稿中。
- ・摂食嚥下機能のアセスメント：過去には主観的な判断が多かった。
→根拠をもった摂食嚥下リハビリテーションの提供へ

2. 今後の予定

- ・10月8日：当初の予定では心理部門が発表担当だったが、予定変更。シンポジウムについての検討に集中する。
- ・11月：学会
- ・2月：勉強会。発表は心理部門、書記は医師部門。

3. シンポジウムについて

- ・発表担当者から発表内容の概要について説明。他委員からもコメント。
- ・重症心身障害は「動けない」「食べれない」「認知が安定しない」などの特徴により生活に支障が出る「生活障害」であり、その方に具体的にどのような支援をしていくか。当たり前のことを当たり前に、地道に積み上げていく。
- ・客観的にデータを拾って可視化していく、評価していくことの大切さ。
- ・「発達」という言葉に対するイメージはさまざま。高齢化の問題に対して「発達」という言葉で捉えて良いのか。
- ・高齢化は本人の変化でもあるが、それに対して環境としてどう関わっていくかという問題もある。
- ・シンポジウムの大目的としては、会場にいる人たちが聞けて良かった、一体感が出るようにまとめていけたらリハビリテーション委員会としても本望。

次回は2025年10月8日（水）19:00～ オンライン開催

以上